小論文講義
1　小論文とは何かを知ろう

ZU1A10-11ZZ-01

1　はじめに

いまから小論文を学び始める人たちには，小論文って何からやればよいのかわからない，何を書いてよいのかわからない，大変そうだなあ，面倒だなあ……，といった思いを持っている人も多いと思います（そうでない人にはゴメンなさい）。確かに，文章を書くことはけっして楽なことではないし，他の教科と違って学習の手順も漠然として見えにくく，不安ばかりが膨らむ科目です。短期間で飛躍的に実力が伸びる，ということもなかなか期待できません。

でも，この講座を通じて少しずつでも着実に努力を積み重ねていくなら，必ず何かを得ることを保証します。それが何であるのかは，小論文という科目の特性上，君たち一人一人で異なります。もちろん志望大学合格は，誰にとってもその何かの一つになりますが。そして，単に合格にとどまらない成果が潜在していることを，最初に強調しておきます。君たちが手に入れるのは，自分を見る目であり，社会を見る目であり，自分自身の「可能性」の広がりなのです。

◆なぜ「小論文試験」なのか

では，そもそも小論文試験は何の目的で行われるのでしょう。言い古されたことではありますが，それは，従来の教科試験の限界が明らかになったからにほかなりません。

学生の「思考力」「表現力」の低下はかなり以前から指摘されるようになったことであり，実際，大学の授業の中心をなすべき「ゼミ」が有効に機能しなかったり，レポートや論文への取り組み方のわからない学生が増加したりする事態に，大学の先生は頭を悩ませるようになりました。入試制度のせいだ，という批判はあちこちで聞かれますが，単に制度の問題ではありませんし，教師や大学など誰かのせいにすれば解決する類の問題ではありません。また，一概に教科試験が悪いとも言えません。実際，大学とは研究機関なのであり，その研究は高度に専門化し，日々進展していますから，大学で学ぶためには高校で各教科の学力をしっかり養っておくことも不可欠です。しかし，競争の激化が受験勉強のマニュアル化を招いたことも確かでしょう。

こうした状況を打開するために，大学は入学試験にさまざまな工夫を凝らし，自分で考える力（マニュアル的ではない真の対応力）を見る試験によって，他者に自分の考えを的確に表現する力を持った学生を選ぶようになってきたのです。面接もその一つですし，小論文がこれほど広まったのも，（最善とは言えなくとも）よい方法だと考えられているからでしょう。実際，小論文試験で合格した学生は，大学入学後も自主性があって積極的に学ぶ傾向がある，という評価も出てきているのです。それはやはり，先に示したように，小論文を通じて得た成果が生きてくるからではないでしょうか。

2　小論文とは何か

◆「作文」とどう違う？

小論文に初めて取り組む人がまず頭を悩ませるのは，「論理的に書け」「作文とは違う」という注文でしょう。「論理的ってどういうこと？」「作文とどこが違うの？」…。この疑問はもっともなもので，例えば国語の時間に「論理的な表現のための言葉づかいとは」といった教わり方をした人は，日本では少ないでしょう。

ZU1A10-11ZZ-02

定義づけの違いは明示しにくいですが，「作文」は文章表現そのものの魅力，つまり印象的な表現や書き手の感性の豊かさを感じ取ることに，比重が置かれていると言ってよいでしょう。もちろん「小論文」でも文章表現は重要ですが，「作文」で効果を持つ比喩表現のような凝った言い回しは必要としません。

作文的なものの言い方を出発点にして考えてみましょう。小さな子どもの作文にもよく見られるタイプの文は，次のようなものです。

「僕は文章を書くのがきらいだ。」

確かに自分の思ったことを言葉に表した文ですが，そこに示される内容はまったくの個人的事柄に過ぎません。ただし，小さな子どもが主にこうした表現に偏るのは自然なことで，これは自分を客観的に見ることがまだできない（＝対象化できない）時期の特徴と考えられるようです。しかし，読み手に自分の感じたこと，考えたことを理解してもらう，納得してもらうためには，少なくとも「なぜきらいなのか」という根拠を示す必要があるでしょう。もっともこの例の場合，「面倒だから」などという根拠を示したところでやはり個人的事情に過ぎませんから，この内容で「論理的」に書くのはやや無理がありそうですね。では次のような文はどうでしょう。

「文章を書くのは難しいと思う。」

これなら自分の考えを読み手と共有する接点も見つけられそうです。例えば，

「文章を書くのは難しいと思う。なぜなら，頭に思い描いた内容を完全に言葉に置き換えることはできないからだ。」

これが根拠の示された文です。

論理的に書くとは，こうした論じる際の根拠，すなわち「論拠」の提示とともに自分の考えを述べることが最大のポイントであり，小論文はこの「論拠」が不可欠である点で「作文」と大きく異なるのです。

◆論拠を示すためには

では，上の文章において，「なぜなら」以下の記述が導かれるためには何が必要でしょう。簡単に言ってしまえば，「どういう点に難しさがあるのか」という「問い」が先に存在しなければなりません。そして，その「問い」そのものを追究していくことが，「論理的に書く」こと，つまり小論文の鍵を握っているのです。「どこが難しいのか」という「問い」からさらに絞り込んでみると，

「文章を書くという作業とはどういうことか」
「それは自分の考えを言葉に置き換える作業だ」
「では言葉は自分の考えをそのまま映せるものなのだろうか」……

といったように進んでいくかもしれません。**「論拠」を示した文章の背後には，こうした「問い」がさまざまに積み重ねられている**のです。したがって，君たちが今後小論文を通して何かを考え，それを文章化する際にもっとも重要なのは，この「問い」をいか

ZU1A10-11ZZ-03

に適切に導き出し，それをどれだけ自分のものとして追究できるかという点なのです。

当然ながら，小論文問題で与えられるようなさまざまな対象について自分から疑問を持つことができなければ，「問い」は生まれません。とりわけ，社会において「常識」とされていることや，自分でも「当たり前」と思っていることを疑ってみることが肝心です。ここではひとまず，**自分の考えたこと（書いたこと）を疑ってみよう**，とすすめておきます。自分自身を問い直すことの重要性は，この講義でもこれから随所に出てくることになるはずです。

3　小論文の形式・様式を知る

小論文が「自分の考え」を論理的に述べるものだということを先に述べました。では，それを実際に解答の形にしていくためには，どうしたらよいでしょう。ここでは，小論文を形にするための要点について概説することにします。

◆小論文の基本は「三要素」

先に，小論文には「論拠」が必要であり，そのためには「問い」が存在しなければならないということを確認しました。これに加えて，「答え」つまり「主張・見解」が必要であることは言うまでもありません。ということは，**小論文を構成するのは「問い」「答え」そして「論拠」の三要素**だ，ということになります。

「問い」は考察の出発点であり，論述の中心的な内容（＝主題）を方向づけるものになります。自分で提示した「問い」に従って考察を進め，その小論文で証明しようとする中心的な問題点を引き出すことが必要です。この「問い」によって提示される考察対象を「論点」と言います。

たいていの場合，小論文問題（つまり設問文と課題文）が示す考察対象の範囲はある程度の広がりがあり，漠然としていることさえあります。「自然と人間」「自由とは何か」などといった設問の場合，特に考察範囲が広くなります。800 字，1000 字といった限られた字数で考えを展開するには，対象が大きすぎるのです。したがって，設問文（および課題文）をもとに考えられるさまざまな問題提起を自分なりに挙げてみて吟味し，絞り込む作業が必要となってきます。そして，**小論文の制限字数の範囲で論述できる問題点は一つだけ**だと考えてよいでしょう。あれもこれもと問題点を取り上げても，それについて十分に論じる，つまり自分の考えとその根拠を十分に提示することは不可能だということを，しっかり意識しておいてください。

「答え」とは，問いに対して自分で提示する「主張・見解」のことです。そこでは，自分なりの価値判断・考えた結論が，読み手に対して明確に伝わるようにしなければなりません。読み手に遠慮するあまり遠回しな表現ばかりになったり，推測・推量としてしか「答え」を示さないのでは，自分の立てた「問い」から逃げたことになります（もちろん，必ずしも断定できない事柄も多く存在しますが）。

そうした結論にならないためにも重要なのが，「論拠」を考えるプロセスです。「考察」とは，この「論拠」を十分に練り上げていくプロセスと言ってよいでしょう。

「問い」＝これから自分が論じていく問題点を絞り込む

「答え」＝「問い」に関する自分の主張や見解

「論拠」＝自分の提示した主張や見解について，なぜそう言えるのかを説明する理由づけ

◆三要素を自在に構成する

この「問い」「答え」「論拠」の三要素を答案として構成するわけですが，実際の論述にあたっては，その構成順序はさまざまなバリエーションが考えられます。例えば，

〈問いの提示〉→〈論拠の提示〉→〈答え＝主張・見解の提示〉

という順序がオーソドックスでしょうが，「論拠」の提示では，具体例や課題文の読解などを通じた「考察」について，字数を費やして述べることになります。したがって，はじめのうちは，その論がどのような答えにたどり着くのか見通しが立ちにくくなりがちです。そうした場合，次のような構成も考えられます。

〈問いの提示〉→〈主張・見解の提示〉→〈論拠の提示〉

この構成の利点は，読み手に論全体の主旨が伝わりやすいことと，書く側の君たちにとっても論の方向を確認しやすいことが挙げられます。ただ，字数が多くなるとかえって最後のまとまりに欠ける恐れも生じてきますので，

〈問いの提示〉→〈主張・見解の提示〉→〈論拠の提示〉→〈主張・見解の再確認〉

という四段階のプロセスで構成するとよいでしょう。こうなると，そのまま標準的な四段落構成にすることができるわけです。

中には 300 字，400 字といった短い字数で論述させるものも見られ，また「問い」が設問であらかじめ絞られている場合もあります。そうした場合は，

〈主張・見解の提示〉→〈論拠の提示〉
あるいは
〈論拠の提示〉→〈主張・見解の提示〉

というシンプルな構成がよいでしょう。

構成に関しては，こうしなければいけないと固く考えるのではなく，場合に応じて自分の発想と論述内容，強調したい部分などを，読み手に的確かつ自然に伝えられるように，柔軟に対応していくことを目指してください。

◆「構成がどこかへいってしまう……」――そんなときは

論理的構成が大切だとわかってはいても，実際に書き進めていくとどうにも話がそれていってしまう。最後になって，結論が問題の要求からそれていることに気づく。――こうした声もよく寄せられます。

簡単に言えば，それは**「結論が見えないまま書き始めたから」**にほかなりません。もちろん，結論とは考えを進めていくうちに出るものであって，先に存在するものではありません。したがって，十分に考えてから書き始める必要があるのは当然です。

そうはいってもなかなか思うようにいかないのが，「考える」という作業。そこで，

このような悩みを感じた人は，問いに対する「とりあえずの結論」をまず用意し，それにつながるように問題提起を工夫したり，具体例を選んだりする作業を行ってみましょう。この際，結論が浅いのでは，という心配が起こります（「心配ない」と思った人は，はじめから出直すべし！）。しかし，ひとまずは，自分が見定めた「とりあえずの結論」にのっとって，小論文全体を構成するのです。

これによって，「構成を見失う」ことは防げます。また，「問い」「結論」「論拠を示すための具体的考察」といったプロセスを自覚的に積むことによって，どの部分について考えが足りないか，はじめに用意した結論のどこに問題があるのか，といった点が自分自身で見えてくるのです。ここまで来たら，もう一度「結論」を練り直しましょう。深みのある「問い」が導かれて，小論文の充実度は飛躍的に高まっていきます。

結論を見据えた構成をあらかじめ考えてから書き始めること

4 「考えを伝える」ということ

◆見知らぬ他者へ伝える

「小論文」が基本的に「作文」と異なることは述べました。その違いから導かれる小論文のもっとも重要な性質は，「自分の考えを他者に伝え，理解してもらう」ということです。詩や随筆などの場合，その作品が自分の趣味・感性に合わなければ，内容を理解するなど到底できないとさえ思うことでしょうし，何とか理解しようとしても無理を感じるものです。そうした場合，読み手にとっては，自分なりの何らかの「解釈」は可能であっても「わかった」とは言えないのです。

しかし，小論文とは，読み手にそうした「解釈」を求めるようなものであってはならないのです。自分の考え（主張や見解）ができる限り的確に読み手に伝わることを目指さねばなりません。論理構成を明確にし，適切な表現も備わっていなければ，見知らぬ他者を説得することは難しくなってしまいます。

◆自分の体験は大切な出発点

「小論文では個人的な体験を書いてはいけない」，と思っている人がいます。その一方で，個人的な体験をだらだらと書き連ねただけの内容も，特に小論文初学者の答案では頻繁に見受けられます。

そのどちらも誤りなのだということを，はっきり意識しておいてください。自分自身の体験について話をするのと，伝聞に基づいて話をするのとでは，話の魅力も説得力もおおいに変わってきます。小論文においても，この点は同様です。問題になるのは，「わたしの体験」が，その小論文問題で考えるべき論点とどう関わってくるかという点です。また，その「わたしの体験」の中に他者と共有できる何かが含まれているのか，より広げて言えば，**人間一般の問題として共有できる何かが含まれているか**，ということが重要です。個人的な体験を書くことが，あくまでも個人的にしか意味を持たない場合，それは出題者や採点者と問題意識を共有することにはなりません。個人的な体験を通して示すことのできる「分析」や，君ならではの「視点」などが読み手に共有されるとき，それは非常に有効な論じ方となるのです。

小論文では，提示された一つの問題を出題者（採点者）と共有しつつも，君が論述する答案の内容は，出題者（採点者）にとって新たな発見となり，興味を引くことが求め

られます。ということは，読み手にとって未知の，君個人の体験をうまく盛り込めれば，それは大変すばらしいことなのです。

◆「……すべき」論の危険性

社会問題などを正面から取り上げた問題の場合，やってしまいがちなのが「○○すべきである」という主張のしかたです。もちろん，それ自体が「正しくない」のではありません。例えば「私たちはみな仲良くすべきである」という主張自体は，ごく正当なもので，文句のつけようもないように思えることでしょう。

「しかし」と，ここでいったん立ち止まって考えてみましょう。「仲良くすべき」であるのは確かなのだけれども，現実にはそう簡単に仲良くできないからこそ，この社会には数多くの問題が存在するのではないでしょうか。まさに「言うは易し」です。したがって，800 字もの字数を費やして結局「私たちは仲良くすべきだ」という以上の内容を何も示していない答案は，読み手にとって得るものがありません。空虚な，物足りない印象しか与えない答案では，到底合格点をもらえるはずがないのです。

◆「内容」か，それとも「表現」か

さて，ここまで読んできて，小論文では内容を優先すべきか，表現（文章力）を優先すべきか，という点で悩む人も出てきたかもしれません。結論から言えば，「両方重要」であることに変わりありませんし，合格できる答案とは，この両者のバランスが取れている答案にほかなりません。表現力（文章力）とは国語力に負うもので，正しい表記・表現で論述するためには，現代文の学習や読書を通じて言語感覚を養うことが重要です。内容の充実は，それと並行して考えていくべきものであり，言葉を扱う能力が高まると考える力も向上するという相互作用もあるのです。したがって「内容」と「表現」のどちらが先ということはまったくないと考えてください。

5　基本的な約束ごとのあれこれ

本章の終わりとして，小論文を書く上での基本的な約束ごとのうちから，特に繰り返し確認してほしい事柄を簡単にまとめておきます。「当たり前じゃないか」と感じる項目も多いでしょうが，その「当たり前」がおろそかにされがちなのは，これまでの指導経験から明言できます。これからも，この講義はもちろん，解答解説でも繰り返し指摘することになりますが，しつこいと思わずに確認してください。ルールを知らなければゲームやスポーツに参加できないように，「入試」という決められた土俵に上がるためには不可欠な事柄ばかりなのですから。

形式面について

◆表記は正しく

誤字・脱字は「皆無」であることを目指しましょう。注意すれば直せるものですし，日頃から辞書で確認する習慣を持つことは国語力の向上にもつながります。小論文も学力をはかる試験の一つであることを忘れないでください。

◆記号（符号）をむやみに用いない

例えば「！」「？」「……」「――」など。絶対に用いてはいけないわけではありませんが，そうしたニュアンス（強調・疑問・留保など）をあくまでも「言葉」で表現するよう努

ZU1A10-11ZZ-07

めることが，論理的文章の基本です。君たちの答案でこうした記号が用いられているときは，気持ちばかりが先走ってしまったり，文章表現に凝り過ぎたり，という場合が多いようです。

◆段落分けを適切に行う

先に触れたように，小論文とは，「主張・見解」「論拠」といった複数の要素から成り立つものです。それを読み手に明確に表現するためにも段落分けは欠かせません。段落分けをしていない小論文は入試では採点の対象になりません。もっとも，200字，300字などと制限字数が少ない場合には例外もありえます。

表現面について

◆文末表現を統一する

文末表現は「だ・である」調で統一するのが基本です。「です・ます」調を混ぜた答案が見受けられますが，これはいけません。「だ・である」調によって採点者に悪い印象を与えることを心配する人もいますが，そのようなことはまったくありません。

◆呼応を正しく

「私は…」と書き始めているのにそれに対応する述語がない文や，被修飾部がどこなのかわからない修飾表現など，「呼応」がおかしな文も頻繁に見受けられます。言うまでもなく，どんなに長い「文章」もその基本は一つ一つの「文」なのですから，その文の構造がおかしくならないようにすることが重要です。

◆「思う」「であろう」「ではないか」といった表現の使い方に注意する

これも絶対にいけないということではありません。ただ，主張を明確にすべき文章であいまいさを残すことは，読み手への訴えかけも損なわれがちになりますし，何より**「考える」ことからの逃げ道を作りやすい**，ということは十分意識しておきましょう。その点を意識した使い方ができれば評価を下げることにはなりませんが，それには十分に訓練された文章力が必要となります。

◆極端に長い「文」を書かない

どの程度が「長い」かははっきり決められるものではありませんが，一つの文が200字にも及ぶような書き方は，読み手の理解を妨げることになり，悪文になりやすいものです。極端な場合は，一つの文＝一つの段落になっているものさえ見受けられますが，**小論文とは読み手のための文章である**ことをくれぐれも忘れてはいけません。

さて，そこで……

「端正な，しかも問題に応える熱意と力を感じさせる文章」

これを目指して自分自身を磨いていきましょう。

医療とリスク社会

1

ZUAJG1-Z1A1-01

次の文章を読み，後の設問に答えなさい。　（100点）

これからの社会の仕組みに関する議論をしている際に，A君から次のような発言がありました。

A君「将来の生活に対する不安や，頻発する犯罪など，私たちの生活におけるリスクが高まっているが，それに備えるのは各個人の責任だ。これまではこうしたリスクへの対応はしばしば社会に依存し，人々もそれを自明視してきたが，これからはあらゆる社会の仕組みについて，自分で自分を守るということを前提として制度設計するべきだ。それが結局は，もっとも効率よくリスクを回避でき，しかも各人が自分の希望に沿った生活スタイルを築くことを可能にすると思う。もちろん，各人はそのために自分の能力を高める必要があるのは言うまでもない。」

設問　自分自身がこれから医療に従事することを念頭に置きつつ、A君の考え方を批判的に検討しながら自分の意見を800字以内で述べなさい。

医療とリスク社会

ZUAJG1-Z1C1-01

1 問題

次の文章を読み，後の設問に答えなさい。　（100点）

これからの社会の仕組みに関する議論をしている際に，A君から次のような発言がありました。

A君「将来の生活に対する不安や，頻発する犯罪など，私たちの生活におけるリスクが高まっているが，それに備えるのは各個人の責任だ。これまではこうしたリスクへの対応はしばしば社会に依存し，人々もそれを自明視してきたが，これからはあらゆる社会の仕組みについて，自分で自分を守るということを前提として制度設計するべきだ。それが結局は，もっとも効率よくリスクを回避でき，しかも各人が自分の希望に沿った生活スタイルを築くことを可能にすると思う。もちろん，各人はそのために自分の能力を高める必要があるのは言うまでもない。」

設問　自分自身がこれから医療に従事することを念頭に置きつつ、A君の考え方を批判的に検討しながら自分の意見を800字以内で述べなさい。

出題意図

論述に当たっては「設問の条件」を絶対に見過ごさないように，と常々強調しているが，このことの意味を，今回は少し違った角度から実感してほしい。そのため「ヒント」では，「自分の考えを位置づける『場』」を理解しよう，と述べておいた。言い換えれば，ある問題に取り組む君たちが出題者によってどのような「場」に招かれているのか，それを適切に自覚して応答することこそ，「出題意図」に適（かな）う小論文を生み出すのである。よく見かけるディベートという試みは，こうした議論の「場」を理解するのに適している。ただし，ともすると説得するための「技術」や「知識」に意識が偏ることもあり，そうなるとやはり大局的な視点が形成されない。また，医療という領域には，ディベート的に「黒白」をはっきりさせる思考スタイルがふさわしくないデリケートな問題がたくさんある。そこで今回は，単純なディベート型をとるのではなく，ある一つの意見をもとに，それが含意する議論の全体像を読み取り，そこに自分の考えを位置づけるという形式で出題することにした。

さて，内容面にも言及しておこう。近年の日本では，「不安」や「リスク」といった，人々の生活のあり方を大きく左右する要因を，さまざまな社会制度の変革においてどう反映させるか議論が続いている。誰もが「安全」「安心」を望んでいるが，しかしそれを実際にどのような仕組みをもって構築するかは，重大な問題である。しかも，「不安」や「リスク」が生じる領域が拡大しているようにも見える。不景気や災害，治安の悪化と

いった問題から，「信頼」の崩壊（医療にとっても重大である），さらに「格差社会」といったように，社会のあり方の非常に根本的な部分に問題の焦点が移っていると言えるかもしれない。この大きな課題をどう料理するかも，今回のポイントになっている。

設問研究

設問が求めていること

すでに上でも触れたが，問題要求の枠組みをしっかり押さえることが，適切な応答（解答）には不可欠である。問題が用意している条件設定を確認しよう。考察する上での最大のヒントがA君の発言内容であることは当然として，その発言の背景，および設問文が示している条件・要求を確認することが重要だ。まず，このA君の発言が「これからの社会の仕組みに関する議論」におけるものであることを踏まえて，第一の条件は，

①「社会の仕組み」に焦点を当てて論を展開し，主張すること

となる。さらに設問文は，より絞り込んだ要求をしている。そのポイントは，

②「（君たちが将来）医療に従事することを念頭に置きつつ」述べること

③「A君の考え方を批判的に検討」すること

の２点である。実は，じっくり考えるとどれもなかなか難しい条件ばかりである。まず②では，ここでの「議論」が「医療」を直接のテーマにしているのではないから，この立場を具体的にどう論述に反映，関連させるかが，出来を左右すると予想される。そして①の「社会の仕組み」というのはかなり漠然としているので，③の「批判的」な視点という指示を踏まえて，A君の議論のうち何を突くことが不可欠かを明らかにする必要がある。その上で，自分の考えを展開しなければならない。

議論の構図の析出

では，A君の見解を読み解きながら，ここでの「議論」の全体像をとらえていこう。発言の冒頭からは，ここでの議論の的が「生活に対する不安」や「リスクの高まり」という現状を踏まえて「社会の仕組み」をどう（再）設計するか，という点であることが理解できる。そしてA君の意見は，「個人が社会に依存しない」ことを前提に考えるべきだ，というものであり，その論拠として「リスク回避の効率性」と，「個人の望む生活スタイルの実現」が挙げられている。いわゆる「自己責任」論の代表的な発言といってよいが，そこでは必然的に個々人の「能力」が問題となるから，A君もその点を気にかけて「能力を高める」ことの必要性を付け加えているのである。

A君の意見を吟味する上での重要なポイントの一つが，この「能力主

義」的側面である。A君は，個人が能力を発揮できるような環境（がつくられること），およびその表裏一体のものとして，競争が十分に行われる環境（がつくられること）を前提としている。また「効率重視」という要素は，社会の役割を重視することによって福祉や医療，治安等の種々の公共サービスが肥大化し，人々の経済的負担が増えるという想定を反映しており（現実に今日の日本で問題化している財政危機のように），そうした公的費用による対応はしばしば非効率的で，個人の自由を縛る側面が強いという見方が読み取れる。

したがって含意として，自分自身の力で対処できる能力をもった人の足かせになる（足を引っ張る）ような仕組みは良くない，という発想もあると言えそうだ。これは，A君に対していわば「ディベート」的に徹底反論したらと仮想してみた場合の，かなり厳しい見方だが，そのような「反論」を思い描くことは議論の構図をかなり明確にするので，考えてみる価値が十分にある。具体的には，能力主義や競争重視の問題点を指摘し，それが果たして「リスク」への対処に結びつくかどうかを問うことができる。また費用負担についても，社会が生み出しているリスクなら，その費用は社会全体で負担するのが当然だ，という論理も成り立つ。それらを踏まえて，試みにA君への「反論」を構成してみると，例えば以下のように書けるだろう。

> 「私たちの生活をとりまくリスクの大半は，実は社会的な仕組みの不適切さや欠如が生み出しているのではないか。そうであれば，自己責任で生活を守れという要求は，不当なものともなり得る。現実に，すべての人が社会的・経済的に平等な位置にあるわけではないし，A君が重視する「能力」を高める手段でさえ平等に与えられているわけではない。はじめから差別や格差が存在する中で，リスクへの対応を個人に押しつけることは，社会をより不安定にするだろう。リスクの増大を踏まえて社会の仕組みを構想するなら，むしろ社会制度が市民を守ることが基本であろう。

この「反論」をA君の意見と対比させた場合の構図は，次のようなものになる。

ZUAJG1-Z1C1-04

A君の主張	・自己責任（自分で自分を守る）を基本とした社会制度 ・個人の生活スタイル実現を優先	【基盤となる価値観】 ・効率のよさ ・個人の能力を重視
批判的視点（反論）	・社会が個人を守る ・現実の不平等を軽視することは格差を広げる恐れがある→社会的不安定を懸念	【基盤となる価値観】 ・効率よりも公平さ ・結果の平等

要するに，ここでの議論の大きなポイントは，「平等」「公平」に関する理解の仕方だと言ってよい。A君は「機会の平等」を指向しており，それに対する反論としてはもちろん「結果の平等」を提示し得る。そして，「効率」や「能力」をどう見るかは，この「平等」観の違いに密接に関わっている。これが今回の議論の枠組みなのである。

議論の再吟味

枠組みを明確にするためにA君への反論を導いたが，この反論に含まれる問題点についても考えたい。というのも，設問は「反論せよ」と求めているのではないし，そもそも議論の全体像をしっかり踏まえるには，異なる意見に関してもその欠点や弱点を理解しておくことが不可欠だ。これは論述に説得力を持たせるための必須条件である。

A君とは反対に「社会制度によるリスク対応」を重視するなら，やはり公的な社会保障サービスの拡充が必要であり，行政や警察といった公的機関の仕事と権限を増やすことになろう。個人の抱えるリスクに公的機関がきめ細かく対応するには，各人の状況を的確に把握しなければならず，見方を変えれば，これは公的機関に個人が管理される社会とも言える。またA君が言うように，行政などが個人の面倒を見てくれるとなれば，人々が自分で自分を守ろうとしなくなる可能性は確かにある。いわゆる「フリーライダー（ただ乗りする人）」の発生である。自分は費用や労力を負担しないで公的なサービスから便益を得る人が増えれば，自分で努力している人にとっては損である。具体的に医療費を考えてみても，医療保険などの負担は全員に課せられるが，日ごろから健康に気をつけているため医療を滅多に受けない人は，医療費負担の増大に対して不公平感を持つことになろう（もちろんいつ病気になるかわからないからこそ「保険」であるわけだが）。すなわち，平等を指向した対策がかえって不平等を招く，という見方もできるのである。今の日本社会では，実際に年金や健康保険などのさまざまな社会保障制度を整えることで，基本的に「社会の仕組み」によってリスクに対応している。それらが現状と合わなくなりつつあるからこそ人々の不安が増しているのだから，その意味で「改革的」と言えるのはA君の立場であり，その主張には一理ある。したがって，「反論」が単に「現状維持」を意味するのでは，A君の立論を崩すことはできない。

さて，こうして見てくると，ここでの議論が想定している対立軸も明らかになる。非常に大きな「社会」の話をしてはいても，核心となる論点は「個人」のとらえ方なのであって，具体的には「自己責任」「自助努力」というものの扱い方の問題なのである。「機会の平等」か「結果の平等」か，という対立軸は古くからある問題なのだが，最近ではこの問題が，「能力主義」「競争中心主義」などの広まりを背景にいわゆる「格差社会」に関する議論として再び活発になりつつあることは，君たちも知っているだろう。

「医療に従事する者として」

では，これが「医療」とどう関わるのだろう。さらに言えば「医療に従事する」者の視点にどんな意味があるのだろうか。近年は医療においても「自助」や「個人の努力」が重視されており，それは「患者本位」の流れと「自己決定」志向に関連している。自己決定・自己選択の実現には，個人の自由の保証と，各人自身の適切な判断能力が求められる。そう考えると，A君の議論を医療にかなり引き付けることができよう。

しかし，医療はそもそもサービスの提供を責務としているから，A君の「自己責任」論，能力主義を単純に徹底することは許されない。それはまた，医療者＝強者だからでもある。医療者は必然的・不可避的に，患者に対して優位に立つ存在である。したがって，弱者としての患者（市民）への配慮をどう形にするかという視点を常に持つことが求められる。ここで「医療に従事する」者の立場を意識するという設問の要求を踏まえれば，解答でとりうる立場はおのずと絞られてくるだろう。もちろん，A君の立場を肯定した意見を述べてはいけないというわけではない。しかし，個人を突き放す姿勢が不適切である以上，限定的な肯定にとどめるべきであるし，どこをどのように肯定し得るのかを論理的に明示することも欠かせない。この点にはしっかり留意してほしい。

そして，「医療者」の視点を示すためには，以上のような本問の文脈に即して具体的に医療のあり方に関する事例を挙げることが望ましい。ただし，その事例自体についての見解を述べるのではなく，あくまでも社会の制度設計を考える“参考材料”であることを意識して論述しなければならない。次項では，その事例を解説しよう。

「リスク」「不安」と医療

ここでは，なるべく多くの事例を議論の枠組みに合わせて整理するにとどめる。個々の要素の詳細については，今後の添削問題や，「Z study サポート」などさまざまなところで取り上げているので，そこから学習を深めてほしい。

医療において「自己責任」志向の議論が現れるのは，主に先に触れた医療費問題，さらにそのつながりとして「健康づくり」に関してである。と

ZUAJG1-Z1C1-06

は言え，当たり前だが個々人の取り組みにすべてを預けて，医療は「責任なし」とするわけではない。健康づくりを「国民の責務」とした健康増進法（平成14年公布）についての評価は分かれるとしても，日本の医療が「予防医療」の推進へと舵（かじ）を切ったことは理に適っていよう。実際，長寿社会への不安から，健康の維持・増進のために何かしなければと思っている人は多いだろう。そこでは，一人ひとりの主体的で自発的な取り組みが不可欠であり，その意味で「自助」「自己責任」の発想が強調されることは必ずしも悪いことではない。

ただし，この健康づくりに関してもさまざまな面から医療のサポートが期待されているし，何より現実に，医療を必要とする人は増え続けている。したがって医療にとって重要なのは，人々の生活上の不安にいかに応え，またその前提として欠かせない「信頼」をいかに得ていくかであり，それは医療の具体的な制度設計のあらゆる場面において重要課題となっている。同時にそれらの課題は，かつて「おまかせ」を基本にしていた医療のあり方から，患者の「自己決定」を汲（く）み取り，患者とともに進める医療のあり方を模索することとも重なる。具体的には，次のような点を指摘できよう。

①パターナリズムからの脱却という方向を実体化するため，インフォームド・コンセントを推進し，専門家である医療者からの情報提供・情報開示によって説明責任を果たした上で，患者と一緒に進める医療を実現すること。「カルテ開示」などもこれに入る。

◀パターナリズム：家父長的温情主義のこと。医療においては，専門的知識を持つ医療者が，治療の際に患者に対して優位な立場から指導することを指す。

②科学的に合理的な医療の追求。ＥＢＭ（根拠に基づく医療）が注目されているように，治療内容に患者が納得できる根拠をもたせる努力をすると同時に，治療方法のばらつきをなくす取り組みが進んでいる。ここでは医療者間の情報共有も課題になる。

③「セカンドオピニオン」の普及やチーム医療の浸透によって，特定の医師の独断ではなく，開かれた人々の協力関係の中で治療に関する判断が下され，また患者の疑問や不安に応えられる場面を増やすことが重視されるようになっている。

◀セカンドオピニオン：現在かかっている医師とは別の医師から，診断や治療法に関する意見をもらう制度。

これらは患者一人ひとりを尊重しつつ，オルタナティブ（別の選択肢）を保証することで信頼関係を構築する取り組みである。新しい概念の例としてはＮＢＭ（Narrative Based Medicine）といったものもあるが，これも「患者一人ひとりの語り（言葉）」を受け止めながら治療方針を立てることで，患者の「安心」と「信頼」の上に医療を展開しようという発想である。不安を乗り越え，リスクに対応するには，やはり「信頼」が不可欠であろう。医療の「仕組み」の設計において，やるべきこと，やれることはまだまだたくさんあるのであり，君たちにもおおいに期待がかかるわけである。

ZUAJG1-Z1C1-07

解答例

例 1

リスクには社会制度によって統御しなければ回避できないものが多いのではないだろうか。個人の能力を重視するとか，各自の生活スタイルを実現するという言葉は魅力的であるし，誰もがそういう希望を持てる社会は確かに幸せだろう。だが一方で，多くの若者が希望を持てないでいるという現実がある。A君のように，リスクにあくまで自己責任で対応するというのは，社会の実情を無視した机上の論理なのではないか。

例えば，個々人が能力を高めることで誰もがＩＴ技術者になれるなら，A君の意見は正しい。しかし現実にはそうはいかないし，それを能力や努力の不足と非難するならあまりに乱暴である。それはA君がおそらく支持すると思われる「自己決定」にも反するだろう。また，A君の意見の背後には競争主義の価値観があり，しかも自己責任という言葉によって，その競争に勝ち抜くような，ある特定の生き方を前提にしているように見えるのだ。

しかし当然ながら，人々に生き方を強制できるわけではない。A君の発想は「強者」の生き方が前提であり，医療者の立場からすれば，それには懐疑的にならざるを得ない。医療者は必然的に強い立場に身を置くため，不安や苦しみを抱えた人への配慮を，単に心の問題ではなく，いかに具体的な形にするかが問われるからだ。患者に自己責任や自律を求めることは大切ではあるが，その前に，患者のそうした主体性を引き出す仕組みを用意し，積極的に働きかけねばならない。人はより所があってこそ安心し，そこから初めて信頼が構築される。そのための仕組みなくしてリスクに耐え得る社会は築けない。

リスクに直面する人々を差別することなく守ることが，社会の仕組みには欠かせない。そのためには今ある種々の格差を解消するよう，制度面で積極的に対応する必要がある。それは必ずしも依存を招くものではなく，むしろ自律への道筋を保証するものと考えるべきである。

（１行25字詰　800字）

◀例１について

Ａ君への明確な反論をベースにしている。もっとも，医療が「自己決定」への配慮を求められている以上，それと結びつく「自助」を否定するものではない。その「自助」は，社会がそれを可能にする環境を用意し，十分に配慮してこそ可能になるのだと強調するのである。すなわち，「安心できる社会」とはやはり「誰もが安心できる環境」でなければ実現しないのだ，という立場を打ち出している。したがってポイントになるのは，Ａ君の意見に「強者の論理」が隠れていると読み，それを医療者ならではの視点から突くことである。近年の「格差社会」論議も視野に入れているので，君たちにとっても議論の「場」に入りやすい立論になっているだろう。

ZUAJG1-Z1C1-08

例2

近年「リスク」という言葉が一般化し，生活の不安や将来に対する不透明感が問題となっている。A君が提起するように，そこで社会の役割をあまりに重視することには問題があるのも事実だ。社会保障にせよ治安にせよ，日本ではこれまで公的部門の果たす役割が大きかったと思われる。リスク増大の原因の一つに，公的制度への依存によって個人が自立ないし自律せず，努力しなくなった点を挙げることにも一理あると言える。

例として医療費問題を考えてみよう。そこには，急速な高齢化という社会の変化に制度が追いつかないという側面もあるが，健康面の問題にすべて医療保険で対処せよと言うのは短絡的である。健康を維持することが誰にとっても望ましい以上，必要なのは個々人が健康づくりの努力を心がけ，医療を効果的・効率的に使うために積極的に学習することだ。主体的な姿勢抜きに健康を維持できないことは，ごく常識的に理解できるだろう。

このように，すべてを制度に頼る時代は終わり，自助努力がカギを握る時代になった，ということは認めねばならない。しかしそれは決して，社会の役割をゼロにすることを意味するのではない。すべてを自己責任に帰することがいかに乱暴であるかは，医療者の立場を踏まえれば自明であろう。必要なことは，社会制度が人々に用意するものを見直し，自分を守るための個々人の努力や能力向上を適切に支援するという発想である。

医療で言えば，予防医療やＥＢＭの普及といった制度的基盤がそれに当たる。人々の積極的な取り組みをうながすような，自助と自己決定をベースにした支援策を充実させるために，社会がなすべきことはたくさんある。もちろん，制度に「ただ乗り」して努力しない人の発生を抑え，そうした意味での不平等を生じないような配慮は必要だ。このバランスをいかに適切にとっていくかが，今後の社会のあり方にとって根本的な課題なのである。

（１行25字詰　800字）

◀例２について

Ａ君の主張において汲み取れる内容を可能な限りに受け止め，その上で「批判的な検討」を行うよう努めたものである。まず，個々人の「自助」「自己努力」を最大限に引き出すことの重要性は十分に認めた。ただし，医療者の視点を踏まえるなら，この解答例が限度であろう。最終段落で具体例も挙げて詳述するように，その個人の「自助」を可能にするための制度的なバックアップがさまざまに構想し得るし，むしろ現実にはそうした制度が不可欠である。したがって，この解答は決して「自己責任」論ではない。このように，ディベート的に意見を組み立てる場合は，単に反対意見を述べればよいというわけではなく，相手の意見を十分にチェックしつつ議論がかみ合うよう配慮するのがポイントだということも理解しておこう。